

## 『妊娠中毒症研究の歩み』

## —加来道隆熊本大学名誉教授の講演にかえて—

熊本大学教授

岡村 均

平成7年9月8・9日、熊本市において開催いたしました第16回日本妊娠中毒症学会において、本分野に関する研究の草分け的存在である熊本大学名誉教授加来道隆先生に、『妊娠中毒症研究の歩み』と題して特別講演をお願い申し上げ、先生の歩まれた研究の道程を拜聴できる機会を設けました。しかし、7月中旬以来の記録破りの酷暑のため体調を崩され、御来熊頂けず、講演は実現致しませんでした。時代こそ違え、先生の歩まれた道は、若い研究者にとって、それぞれの指針となるものと考え、関係者の1人として、先生に代わり、40年にわたる御研究の一端を御紹介申し上げます。

加来先生は、昭和3年—世界大恐慌の前年—東京帝国大学を御卒業になり、磐瀬雄一教授が主宰される母校の産科学婦人科教室に入局しておられます。当時は、現在のような妊婦検診は行われておらず、また自宅での分娩が主流の時代であり、妊産婦死亡率は270（平成4年、9.2）、乳児死亡率は120（平成4年、4.5）と、母児の予後は極めて悪く、子癇・早剥・肺水腫などで相次いで死亡する妊産婦と、その枕元で泣き叫ぶ子供や家族の愁嘆の姿が、先生の妊娠中毒症の研究動機となったと、後年、述懐しておられます。

先生は、常位胎盤早期剝離患者の剖検で得られた腎臓の病変が、肺炎球菌多糖体により惹起される実験的腎炎と酷似していた点に注目され、妊娠中毒症と胎盤多糖体との関連を追求されるようになりました。昭和26年以降、胎盤より抗原性のある多糖体様物質を抽出されまし

た。そしてこれを抗原として妊娠中毒症患者血清中に沈降反応でこれに対する抗体の存在を証明されました。この多糖体を人胎盤多糖体様物質（KPS）と命名しておられます（日産婦誌 6:1031-1049,1954）。

このKPSに対する抗体は、正常妊娠には証明されなかったのに、妊娠中毒症患者の約50%に証明されております。人胎盤KPSで感作した妊娠家兎では、妊娠中毒症の徴候である蛋白尿・浮腫が出現すると共に、妊娠中毒症患者の諸臓器に見られるような病変を認めています。また実験的に高血圧をおこした家兎や食塩を負荷した家兎で一層著明な病変を認めています。兎において人胎盤KPSと、腸チフス・パラチフス混合ワクチンを十分な間隔を置いて注射し、それぞれ抗体産生能を調べてみると、腸チフス・パラチフス混合ワクチンによる抗体産生能の高い家兎は、人胎盤KPSに対する抗体を産生し易いという傾向を認めています。そこで妊婦に腸チフス・パラチフス混合ワクチンを注射し、抗体産生能と妊娠中毒症発症率の関係を調べてみたところ、低凝集素価群より高凝集素価群に妊娠中毒症が発症し易いことを統計学的に証明しておられます。これら一連の業績を御纏めになり、昭和27年には日本産科婦人科学会において、宿題報告として発表しておられます。（日本医事新報 1480:2975-2982,1952）

この宿題報告において、同じく妊娠中毒症の研究（胎盤ポリペプチド説）しておられた日本医科大学真柄正直教授との間で、慣例を破った妊娠中毒症の病因に関する激しい論争が始まり

ました。その論争は、以後10年間、昭和36年の東京における学会まで続きました。この間、両教室を挙げた妊娠中毒症の病因に関する研究は、日本に於ける妊娠中毒症の研究をリードし、世界的にも評価される成果を挙げたと聴き及んでおります。

昭和37年には、第14回日本産科婦人科学会総会も担当しておられます。

先生は、昭和42年の日本アレルギー学会会長として、“妊娠中毒症とアレルギー”と題した会長講演において、晩期妊娠中毒症の発症にはKPSによる免疫機序が関与しているものの、妊娠家兔において母児の予後に相関を持つ高血圧症の発症を、KPSでは常時再現出来ず、今後の更なる研究を要すると結ばれております。先生の真摯な学者としての態度と飽く無き妊娠中毒症の病態解明への執念を垣間みることが出来ます。

妊娠中毒症の臨床的研究にも幾多の業績を残されていますが、紙面の都合上一部のみ御紹介申し上げます。高血圧家系の妊婦は正常血圧家系の妊婦と比べ約4倍も妊娠中毒症を発症し易く、なかんずくアレルギー素因や血管痙攣素因

のあるものは発症率がさらに高く、微量のノルアドレナリン注射による昇圧効果の高いものには妊娠中毒症の発症率が高いことを指摘しておられます。また妊娠中毒症の後遺症について教室例のデータを整理され、「晩期妊娠中毒症の後遺症の予防と治療」と題して昭和41年の日本産科婦人科学会臨床大会で特別講演をしておられます。(日本医師会雑誌 59:151-155,1968)

今まで現象論と病態論に終始していた感が強い妊娠中毒症に関する研究ですが、最近になりやっと分子生物学的手法に代表される研究方法の飛躍的な進展と相俟って、厚く覆われたそのヴェールが次第に開かれつつあります。卓抜した発想を基に、弛まぬ努力のもと、演繹と帰納の繰り返しによってのみ真実に迫り得る生命科学にとって、先人の永年に亙る貴重な御体験と輝かしい業績は、そのまま後輩の臨床医や研究者にとって貴重な教訓となるものと考えて本稿を書かせていただきました。

最後になりましたが、先生の一刻も早い御快癒を、会員各位と共に祈念いたしたく存じます。